特別企画

卸連合会 創立85周年

卸連合会歴代会長インタビュー「医薬品卸の歴史と今後の展望」

松谷高顕 卸連合会 第11代会長 に聞く

医薬品卸の社会的責任の重さを痛感した４期８年



インタビュアー：荒川隆治（一社）日本医薬品卸売業連合会副会長
（アルフレッサホールディングス㈱ 代表取締役社長）

日本医薬品卸売業連合会は2026（令和８）年１月に創立85周年を迎えました。
災害大国である我が国は、地震や台風、豪雨に加え、山林火災など多くの災害に見舞われています。
そうした中、医薬品卸は人々の生命と健康を守るべく医薬品の安定供給に努めてきました。
一方、医薬品卸を取り巻く環境は、長期化する医薬品の供給不安問題や、デフレからインフレへの経済環境の変化、
毎年の薬価改定や中東情勢によるエネルギー価格の高騰、原材料価格の上昇など、
医薬品の安定供給へのリスクがますます高まりつつあります。
そこで、卸連合会の会長を歴任された皆様に、変革期を迎えている医薬品卸の歴史を振り返り、
ポイントとなった出来事や今後の医薬品卸の展望などを語っていただくインタビューを企画しました。
その第１弾として、第11代会長を務められた松谷高顕様にお話を伺いました。

2026年９月８日（火）15時30分～16時30分　於：卸連合会応接室

業界再編に伴って医薬品卸の社会的責任も増した



会長就任時代を思い起こし、インタビューに応える松谷高顕卸連合会第11代会長

荒川　日本医薬品卸売業連合会は、1941（昭和16）年１月13日に各地方医薬品卸配給機関の中央連絡組織である全国地方卸薬業連合会として創立されました。1941年は奇しくも松谷様がお生まれになった年でもあり、創立85周年を祝うインタビュー第１弾に松谷様にご登場いただくことに何かのご縁を感じます。そこで、過去を振り返りつつ、お話を伺えればと思います。

松谷様は2001（平成13）年から2009（平成21）年までの４期８年にわたり第11代の会長を務められました。まずは、会長在任時に印象に残っていることをお聞かせください。

松谷　私が会長に就任した当時は、業界再編が進んでいました。就任当時、医薬品卸企業は会員構成員（本社）で180社ぐらいありましたが、現在は68社になり、グループとしては５つか６つに集約されています。

そのような中で、医療用医薬品はメーカーにとっても患者さんにとっても極めて大事な商品として、売上も伸びていました。医療用医薬品の重要性は高まっており、医薬品卸も社会的なインフラとして自分たちの役割を考えていかなければならない時代に入っていたと思っています。医薬品卸売業界の規模が大きくなればなるほど社会的責任は重くなり、取引においても独占禁止法などの約束事をきちんと守らなければならないことを本当に痛感しました。

私自身のことを振り返ると、1992（平成４）年に新しい薬価制度になったとき、流通で変わったところを全国の卸の皆さんに理解してもらうため、いくつかのチームに分かれて全国各地区を回って説明していました。そのとき、公正取引委員会から呼び出されて、卸連合会として談合を指導しているのではないかという疑いをかけられました。そうではなく、制度が大きく変わったため、その趣旨を説明しているのであって、決して談合をしようということではないと伝えました。宮城卸に公正取引委員会の立入調査が入ったときには私のところにも来て、卸連合会が関わっているのではないかとかなり厳しく聴取されたことが、就任当初の強烈な思い出として残っています。

荒川　会長に就任された前後は、医薬品卸企業の合従連衡のさなかだったと思います。そのような中で、医薬品卸としての安定供給も含めた社会インフラの重要性が高まり、企業の規模拡大に伴って社会的責任も増していきました。まさに変革の時代だったと感じます。

そして、新しい流通制度の浸透のために全国を回られていたときに公正取引委員会の呼び出しがあったとのお話ですが、そのこともあって、卸連合会の会長として公正な取引を実践していかれたのではないでしょうか。その結果、医薬品卸売業界は変わっていったのだと思いますが、現在の医薬品卸売業界、医薬品流通の姿をどのように感じていますか。

松谷　医薬品卸企業の集約が進んだとしても、それぞれの地区では以前からあるお得意先との関係は継続していると思います。それでも、私が会長を務めていた頃よりも、医薬品の取引自体は安定

しているのではないかと感じています。昔に比べてお互い勉強して取引の改善に努め、また、医薬分業が進んで、薬局に対する売上が大きくなっていきました。

私が入社した当時は、お得意先の多くは個人のお医者さんで、それぞれに考え方があるためお医者さん個々に対応していかなければなりませんでした。そのため、中には医薬品卸としての取引のルールをなかなか理解してもらえないこともありました。しかし、いまは医師会や病院の団体、さらには薬剤師会や薬局の団体などを通じて、医薬品流通におけるお互いの立場などが認識されるようになり、理解し合える形になって流通改善はかなり進んだと思っています。

流通当事者同士の意思疎通が深まり流通改善が進んでいった

荒川　流通改善がかなり進んだとのことですが、具体的にはどのように進んだのでしょうか。

松谷　2004（平成16）年に厚生労働省が「医療用医薬品の流通改善に関する懇談会（流通改善懇談会）」をつくって、医薬品卸の代表として私を含めて３名が懇談会メンバーに選ばれて出席しました。流通改善懇談会は「製・配・需」、すなわち製造と配送の団体、そして需要者である医師や医療機関、薬剤師や薬局の団体などの流通段階の代表者に加え、上原征彦先生、嶋口充輝先生、三村優美子先生の３名の学識経験者がメンバーになっていました。

その懇談会では、医療用医薬品の流通の問題点などについて検討し、製・配・需全体で真摯で公正な取引をめざして議論しました。長らく医薬品流通の問題を考える機会がありませんでしたので、医薬品卸にとっては大変ありがたい場ができたと思いました。同時に、医薬品卸自身も流通のあり方を勉強し、変わっていかなければならないという認識が強まり、会長として全国の卸の地区会を回ってそのことを説明して理解を得るように努めました。



医薬品卸の歴史を振り返りつつ、インタビューする荒川隆治卸連合会副会長

荒川　流通改善懇談会が発足し、製・配・需のいわゆる川上から川下までの流通当事者が一堂に会して、忌憚なく意見を出し合って意思疎通を深めながら流通改善を進めたわけですね。

そのような中で、会長として特に重視したことやご苦労されたことなどを教えてください。

松谷　流通改善懇談会などでメーカーや医療機関・薬局、医薬品流通に詳しい先生のご意見を聞き、医薬品卸も自分たちだけの考えで取引を進めてはならないと感じるようになりました。公で認められる流通にするため、私たちも慣習による取引から変わっていく必要があり、そのことに注力しました。医薬品卸が良いと思ったことでも、社会や制度上で認められない限り通用しません。そのことを私たち自身が学び、改善したことで、医薬品卸の事業活動は地に着くようになり、現在があるのではないかという気がします。

苦労ということでは、行政との関係づくりに腐心しました。当時、厚生労働省の経済課が担当課でしたが、ご存じのとおり２年に一度の人事異動で課長が交代しますので、そのことへの戸惑いが

ありました。医薬品卸や取引の現状を理解してもらうように説明して信頼関係を築いても、２年後には新しい課長になってしまうため、長期的な取り組みが進めづらいことを感じました。また、経済課とはまったく違う部署から異動してきた課長の中には、医薬品流通の問題に関心を持ってもらえない方もいて、どのように対応すればよいのか悩んだこともありました。

IFPWなどを通じて国際交流にも熱心に取り組む

荒川　激動の時代の中で流通改善を進めたことによって、医薬品卸のいまがあるというお話がありました。その国内での取り組みとともに、会長の時代には世界の医薬品卸との交流や関係づくりにも熱心に取り組まれたのではないでしょうか。その中での思い出をお聞かせください。

松谷　ご存じのとおり、世界の医薬品流通団体の組織としてIFPW（国際医薬品卸連盟）があり、２年に一度、世界各都市で総会を開催しています。私の会長任期中にも計４回の総会があり、日本からも多くの皆さんに参加していただきました。

IFPWでは米国やヨーロッパの流通のあり方を学んで参考にしてきたわけですが、その後、アジアなどからも参加するようになりました。中でも人口が圧倒的に多い中国やインドなどは市場として重要であり、それらの国々との関係を大切にしなければならないことを感じました。また、私の会長任期中は、特に韓国や中国と交流が深まり、意思疎通を図るようになりました。



荒川　国内の活動だけでなく、IFPWなどを通じて世界を俯瞰しながら卸連合会の運営を進められたとのことですが、韓国との交流では松谷会長時代の2007（平成19）年９月に第１回の日韓医薬品流通フォーラムを韓国・釜山で開催しました。

当時の日韓交流で印象に残っていることをお聞かせください。

松谷　当時は韓国側が交流に熱心で、医薬品流通のあり方を日本から学ぼうという熱意を強く感じました。また、IFPWにおいても、アジアの中では韓国が最も積極的に関わろうとしていました。韓国が総会の自国開催を強く望んでいたことから、理事会で、アジアで総会を行う際、ソウルで開くことを提案しました。ところが、理事たちになかなか承認されませんでした。そこで私は、韓国はIFPW発足当初からのメンバーであり、第１回総会から日本とともに出席していることを伝え、アジアの代表として総会開催地にふさわしいことを訴えて、理事たちに納得してもらいました。

その結果、2010（平成22）年に韓国・ソウルでIFPW総会が開催されました。韓国の皆さんは非常に熱心に総会を運営し、ソウル総会は成功裏に閉じました。その総会を通じて感心したことは、韓国政府が国際会議の開催を自国のステータスが上がることとして捉え、医薬品卸の関係者と一緒になって総会を支えていたことでした。医薬品関係の担当大臣も登壇し、官民が足並みを揃えて総会を成功させようとしている姿がとても印象的でした。

荒川　IFPWにおいて松谷様は、2002（平成14）年のモナコ・モンテカルロ総会でIFPW会長に就任されました。そのIFPW会長時代に印象に残っていることは何でしょうか。

松谷　IFPWの次期開催地区の理事が会長になるという慣例があったので就任しましたが、非常にプレッシャーを感じました。そのときは日本での開催でなく、2004（平成16）年に中国・上海での開催になりました。

地域に根ざしていることが医薬品卸の最大の強み

荒川　次に、大規模災害やパンデミック発生時の医薬品流通において、医薬品卸に期待することをお聞かせください。

松谷　東日本大震災や熊本地震、能登半島地震などの大規模災害時や新型コロナウイルスのパンデミック時における医薬品卸の皆さんの活躍は、大変頼もしく感じました。卸連合会としても、厚生労働省から感謝状をいただいています。

医薬品は患者さんにとって不可欠のもので、大規模災害やパンデミックの発生時には患者さんをはじめ、直接関わる医療関係者はかなりの数になります。特に災害時には、医薬品卸の皆さん自身も被災している中で、お得意先の隅々まで医薬品を届けるのは大変なことだと思います。道路が遮断されて車が通れなくなったとしても、自転車や徒歩で確実に届けています。それは、地域に根ざし、その地を知っているからこそ届けられるのであり、そのことが医薬品卸の最大の強みだといえましょう。

私も営業出身ですから、緊急時に夜間に医薬品をお得意先に届けた経験があります。医薬品を必要としているお得意先、患者さんに届けるという使命感が卸の皆さんに染みついているからこそ、緊急事態発生時にもその力が発揮されるのだと思います。

荒川　地域に根ざしてというお話がありましたが、それが医薬品卸の一つのキーワードだと感じました。営業のご出身とのことですが、例えば地域の支店長時代や若い頃の営業の現場での思い出があればお聞かせください。

松谷　私が個人的に経験したこともそうですが、当社の社員が地域のお得意先に丁寧に対応している姿を見たり、お得意先の挨拶回りに行ったとき、お得意先から感謝の言葉をいただいたりしたときに、地域に根ざして営業活動を行っていることの意義と大切さを強く感じました。社長になってからも、現場でお得意先のことを考えて対応している社員には、常に感謝の気持ちを持っていました。そのことは、どの医薬品卸でもいえることではないでしょうか。



お得意先のお医者さんは、急患があれば何を置いても対応します。そういう姿を私たち医薬品卸は身近に見てきていますので、卸の使命として非常事態であっても迅速・確実に医薬品を届ける行動を起こしているのだと思います。

荒川　2024（令和６）年１月１日に能登半島地震が発生し、１月に行われた中央社会保険医療協議会に私は専門委員として出席していたのですが、会の直前に当時の医薬産業振興・医療情報企画課の水谷課長がすっと立ち上がり、「今回の能登半島地震では、卸連合会の皆さんに本当にお世話になりました。ありがとうございました」とお礼の言葉を述べられました。そのとき私は、社会インフラの役割を担う医薬品卸の一員として、改めて身の引き締まる思いがし、また、医薬品卸の皆さんが使命感を持って活動していることに誇りを感じました。そのことを、いまの松谷様のお話から思い出しました。

偽薬の流通を許さない仕組みは変えるべきではない

荒川　次の質問ですが、日本の医薬品流通、あるいは医薬流通産業全般における将来について、大所高所からのお考えをお聞かせください。

松谷　世界を回っていると、国の力が非常に強いところや少し社会主義的な制度が取り入れられている国は、医薬品卸が国営に近いようなところもあり、それぞれの国で医薬品卸のあり方が違うことを感じます。米国やヨーロッパの医薬品卸のことをわかったうえで日本の医薬品流通の将来を考えることは大事ですが、まずは日本の医療政策の中で医薬品卸がどうあるべきかを考えてもらいたいと思います。もちろん、卸連合会の中の委員会でもそのような議論がなされているでしょうが、卸連合会としてだけでなく、各医薬品卸自身でも考えることが大事ではないかと思います。

私が海外でびっくりしたのは、スイスへ行ったときに、朝、散歩をしていて公園のゴミ箱を見ると、そこに麻薬を打った後の注射器がいっぱい捨てられていたことでした。麻薬に対する考え方は国によって違うかもしれませんが、麻薬を自由に使ってよいとは思っていないはずなので、そのゴミ箱からは麻薬の蔓延や麻薬患者に対する諦めのようなものを感じました。日本でも麻薬や覚醒剤の問題はあるのでしょうが、きちんと取り締まられており、さすがに公園のゴミ箱に注射器が捨てられるようなことはあり得ないでしょう。

荒川　その意味では、日本では世界に冠たる国民皆保険制度のもと、私たちが医薬品流通を担うことで医療を下支えしています。そこは私たちも誇りを持って仕事をしているわけで、医療のトリレンマといわれる、医療の安定的な品質の維持、医療へのアクセスの良さ、そして医療の経済性のすべてを成り立たせているのは現在の日本の国民皆保険制度だけであり、欧米諸国やOECD諸国ではそれが成り立っていないと思います。

ただ、日本でも毎年薬価改定となり、医療保険の維持においては様々な問題が生じています。そのような状況にあって、医薬品卸として変えるべきこと、あるいは変えてはいけないことを、どのようにお考えでしょうか。

松谷　ヨーロッパの医薬品卸は、日本よりも少ない数で、フルラインが当たり前になっているところが多く、米国ではブローカー的に自由にビジネスを行っているところがあります。日本でもかつてはブローカー的なビジネスはありましたが、卸連合会傘下の各医薬品卸が規範をきちんと守って医薬品を流通していることで、例えば偽薬の問題は生じていません。そういう仕組みは変えていくべきではないと思います。

荒川　日本は制度上のこともありますが、医薬品卸業界に携わる人たちのルールを守ることへの意識が非常に高いのではないでしょうか。その結果、業界全体で良好な形になっているのではないかと思います。

地域の医療を支えている使命を認識して業務を進めてほしい

荒川　最後になりますが、卸連合会や医薬品卸の次の世代へ向けてメッセージをお願いします。

松谷　医薬品卸の本質とその役割から、どんなときでも医薬品が患者さんに届くようにしなければなりません。その意味で、医薬品卸の社員は、利益を上げて会社に貢献すると同時に、地域の医療を支えている使命を十分認識して仕事に励んでもらいたいと思っています。

そのためには、社員教育が大事であり、それがしっかり行われている企業の集まりが卸連合会であるということが、会長を経験した者としての願いです。

荒川　いまの次世代へのメッセージを踏まえ、一企業として現場で実践するだけでなく、卸連合会としても実践していきたいと思います。本日は貴重なお話をありがとうございました。



インタビューを終えて　松谷第11代会長（右）と荒川副会長